

## 入選 福岡県 江田 日和 様 (高校生)

4年に一度の楽しみだった。山梨に住む祖母に会えるのは4年に一度のことだった。福岡から山梨に飛ぶのはやはり旅費がかさみ、その他諸々の点で4年に一度が限界のようであった。しかし、新型コロナウイルスによってこのルーティンは見事に打ち壊され、今年の祖母との再会は先延ばされることとなった。週に一、二度祖母とは通話をするものの、どこか物寂しさがあり、富士の峰と祖母の笑顔をこの夏も懐かしく感じていた。そんな中、私はこのエッセイを書く機会を得た。年金を難解で遠い存在だと思っていた私の筆は思うように進まず、諦めの音を出していたところ、ふと祖母の顔が頭に浮かんだ。

祖母は3年前に退職し、いわゆる年金生活を送っている事を思い出した。早速、祖母に連絡を取った。すると、祖母は老齢基礎、厚生年金によって生計を立てていること、そもそも年金とはどのような制度かなどを詳しく丁寧に教えてくれた。その中でも印象に残ったのは、私たち若い世代の人々が祖母の世代の人々をこれから先、支えていくことの大変さについてだった。耳にタコができるほど日本の大きな社会問題として懸念されている少子高齢化、いや、超少子高齢化問題。これは、年金に大きく影響しているそうなのだ。年金というものは若い世代の働き分によって成り立っていて、現状は分数でいうと、分子が大きくなりつつあるという事実がある。若者の中には少子高齢化によって、自身が貰う立場になったら、今貰っている高齢者よりも金額が小さくなるのは必然的で、我々は払い損してしまうのではないかと嘆く者もいる。しかし、私は祖母の話聞いてそうは思わなかった。なぜなら、私にとって年金というものは遠く離れた地で暮らす祖母と私をつなぐ架け橋になると思うからだ。私が将来、職に就き、年金を納められるくらいに成長した時、間接的ではあるが、祖母の生活を支える柱となることができるのだ。これは、私個人の年金のとらえ方であるが、それぞれ人にはきっと大切な人がいると思う。何も、祖父母に限定する必要はない。身体障がいを持って生まれた兄弟、思わぬ事故に遭って障がいを持った友人、それから、もしあなたが先に死んでしまった時に悲しんでくれるであろう、生涯のパートナー。彼らのために納める年金のどこに損があるのだろうか。年金は大切な人のために納め、その大切が受け継がれていく。これこそが年金の本当の存在意義なのではな

いだろうか。私は今まで、ほとんど知識のなかった年金というものに大変深い想いを抱いた。

今は声のみでしかコミュニケーションが取れない状況であるが、いつか私が成人し、年金を納める立場になったとき、「こんなに大きくなったよ」と笑って祖母に再会できる日を信じて、日々を重ねていきたいものである。